和歌山県地球温暖化対策情報誌

わおん通信

2021 冬号 vol.43

特集 「いただきます」ではじめる気候変動対策

CONTENTS

P2－P3
「うみがめ」がビーチクリーンを応援
気候変動をテーマにマルシェ開催
学校が結ぶ、地域の防災と気候変動対策
気候変動への意識、昔と今でどう変わった？

P4－P5
「いただきます」ではじめる気候変動対策

P6 県情報

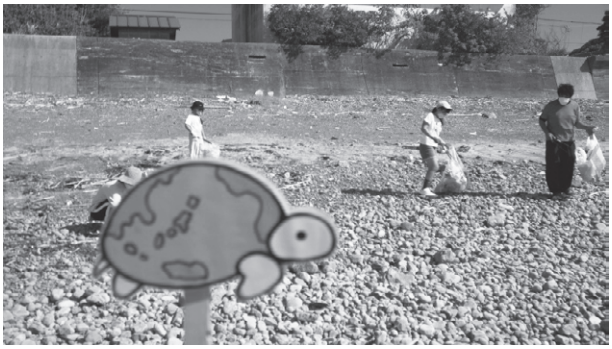
P7 推進員さん訪問記㊲
なるほど　ザ・ワード

P8 INFORMATION

「うみがめ」がビーチクリーンを応援

2021年10月16日
うみわかまもるプロジェクト
御坊市名田町野島漁港

[ウイズ・ア・スマイル]



和歌山生まれのアオウミガメ、海のクリーン活動キャラクター「うみわかまもる」が御坊市名田町の野島漁港で行われたビーチクリーンイベントの応援に行きました。このイベントは、御坊市の男女共同参画ボランティアグループ「ウイズ・ア・スマイル」の主催で、今年2年目となります。

この日、子供から大人まで57人が参加しました。開催のあいさつの後、「うみわかまもる物語」の紙芝居発表がスタート。この紙芝居は、和歌山市立和歌浦小学校の児童が制作したもので、「ビーチには時として危険なものが落ちていることや、拾ったものがごみなのか、落とし物なのか、判断に迷うものを拾った場合の対応」など、ビーチクリーンを安全に実施するためのルールが、わかりやすくまとめられています。紙芝居でルールを確認した参加者は早速海岸へ向かい、片手にトング、もう片方の手にごみ袋を持って、次々とごみを拾い集めていきました。漂着ごみは多種多様で、ビニール袋やペットボトル、大きなものだとブイや漁網などの漁具や古タイヤなどもありました。そして1時間足らずで地域指定の45リットル袋で19袋分が集まりました。清掃後、参加者はごみ袋の山を前に、「うみわかまもる」と一緒に記念撮影。参加者たちは、清々しい汗を流しながら、素敵な笑顔で解散しました。

（「うみわかまもる」については8ページのインフォメーションをご覧ください）

気候変動をテーマにマルシェ開催

2021年12月12日
日高町

[アイデアル]

日高町池田にあるカフェの敷地で毎月1回「コミーダ・リンピア」というマルシェイベントが開催されています。「コミーダ」とは食事やランチ、「リンピア」はクリーンや清掃という意味のスペイン語です。このイベントは、地球温暖化防止活動推進員の嶋田奈津子さんをはじめ、かつてメキシコ生活をしていたメンバーらとともに、「メキシコで体験したマルシェを地元でも開いてみよう」、という発想から1年前にスタートしました。買い物や食事の機会を通じて、資源循環のしくみや気候変動対策など、持続可能な暮らしについて人々が集い、そして楽しみながら体験できる取組としてはじまりました。

12月のイベント当日、十数のショップが出店しており、ベトナムやタイでおなじみのフォーをはじめ、カレー、餃子、パンなどのフードや、アクセサリーや雑貨、また自然農法で育てた野菜など、オリジナリティあふれる「手づくり」の商品が並んでいました。イベント当日は、ちょうど「コミーダ・リンピア」の1周年のお祝いということもあり、たくさんの人で賑わっていました。カフェの一角では環境関連ドキュメンタリーも上映。午後からは感謝の意を込めた餅まきイベントもあり、終始訪れた人々の笑顔であふれていました。嶋田さんは「日々、繰り返される〝選択〟について、どのような社会に1票を投じるかについて、マルシェを通じてシェアしていきたい」と話していました。

このイベントに関する情報は：インスタグラム⇓「コミーダリンピア」で検索

学校が結ぶ、地域の防災と気候変動対策

2021年12月22日
ロケットストーブと防災ベンチを寄贈
和歌山県立田辺工業高等学校

[紀南地域協議会]

和歌山県立田辺工業高等学校の生徒が作成したロケットストーブなどの防災グッズが近隣の自治会に寄贈されるということで、令和3年12月22日、その寄贈式が行われました。これらの防災グッズは、地球温暖化対策紀南地域協議会の寄附金を活用し、同校の生徒12人が授業の実習で制作したものです。寄贈されたのは、コンクリート製の排水ますを加工した防災かまど、防災かまどを収納できるベンチ、そして小枝や細い薪などを効率よく燃焼し、災害時に熱調理器としても使えるロケットストーブです。生徒たちは、制作を通じて設計、図面、加工、仕上げといった工業技術を学びながら、苦労して完成させたそうです。

防災グッズを受け取った自治会メンバーは「とても美しく完成度の高いものなので、防災だけでなく地域のおまつりやイベントでも活用していきたい。」と嬉しそうに話してくれました。このストーブは、県センターにも寄贈されていますので、実物を見たい方は、ぜひお立ち寄りください。

（推進員　多田　祐之）

気候変動への意識、昔と今でどう変わった？

2021年11月18日
ふれあい人権フェスタに出展
和歌山市わかやまビッグホエール

[県環境生活総務課・県センター]

毎年11月に公益財団法人和歌山県人権啓発センターが主催する「ふれあい人権フェスタ」に今年も出展しました。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となりましたが、今年度は、会場外の飲食関連の出展をなくし館内の出展のみとなるなど、内容を一部変更し、出展数が例年の7割程の規模での開催となりました。

県環境生活総務課と県センターの共同出展は、6度目となりました。今回は、気候変動のメカニズムとその影響や、地球温暖化を防止するために私達市民ができる行動をまとめたパネルを会場に掲示しました。また、「環境意識に関する実態についてのアンケート」も実施しました。アンケートの内容は、「気候変動による影響についてどのように感じているか、またその原因はどこにあるか」といった問いに関して、3年前と現在の認識を比較するものでした。ブースの担当者から、気候変動などの展示内容の説明を受けながら、アンケートにじっくりと向き合う回答者の姿がありました。

例年に比べ、比較的まばらな来場でしたが、40人からアンケートの回答があり、気候変動に対する関心の高まりを伺うことができました。他のイベントが相次ぎ中止となる中で貴重な啓発活動の機会となりました。

特集 「いただきます」ではじめる気候変動対策

「食品」は、私たちが生きていくために必要なものですが、気候変動に対して、どんな影響を及ぼしているのでしょうか。今回は、食料事情を理解するとともに、気候変動との関係について考えてみます。そして、県内での取組を紹介しながら、一人ひとりができる工夫やアイデアを共有していきます。

世界と日本の食品ロス

新聞やテレビなどで、「食品ロス」というキーワードを盛んに目にするようになりました。2019年に国連環境計画が発表した世界の食品廃棄量は9.3億トンであり、そのうちの６割が家庭から排出されています。一方、日本の食品廃棄量は570万トンあり、そのうち事業から排出されるものは309万トン（54%）、家庭から排出されるものは261万トン（46%）となっています（2021年11月農林水産省が公表）。これは国民一人が毎日、お茶碗１杯分を捨てている計算になります。

食品廃棄の原因

食品が廃棄される原因をプロセス毎に見ていくと、次のようなものがあげられます。

食品廃棄の主な原因

【生産＆加工】豊作時の生産調整／規格外／保管時の虫の混入や腐敗／加工や表示のミスによる除外　など

【流通＆販売】輸送時の破損や腐敗／仕入と消費とのギャップ／売れ残りによる期限切れ　など

【購入＆消費】買いすぎ／調理のしすぎ／食べ残し　など

食品ロスと気候変動の関係

では、なぜ食品ロスが問題となっているのでしょうか。それは気候変動と大きく関係があります。「いただきます」と手を合わせて食べ始めるまでに、食品は様々なエネルギーを消費して食卓に上がります。

食品にかかるエネルギー利用

【生産＆収穫】農作業全般／漁業全般／化学肥料や農薬の工場生産／エサとなる飼料の生産

【加工＆販売】原料の仕入れ／加工全般／製品の輸送／廃棄処理

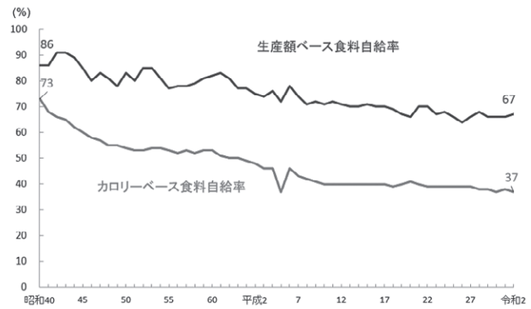
【消費】買い物時の運搬／調理／（食べ残し、期限切れによる）廃棄処理

これらすべてのプロセスにおいて多くのエネルギーが必要となります。つまり、食品ロスを削減することで、エネルギー削減→気候変動対策に直結していることがわかります。

日本の食料自給率とエネルギー消費

2022年２月に農林水産省が発表した食料自給率は、37%です（カロリーベース）。自給率が73%あった昭和40年度（1965年度）の半分近い数値となっており、先進国の中でも最も低い水準となっています。その要因は、様々ありますが、農業生産者の減少とそれに伴う耕作放棄地の増加など農業そのものの衰退などが挙げられます。

昭和40年度以降の食糧自給率の推移



（農林水産省WEBサイトより）

食品にかかるエネルギー消費の試算では、日本への輸入に伴うCO_2排出量は年間1,690万トンであり、国内の輸送に伴う排出量900万トン（輸入食料を含む）と比べて、1.87倍にのぼります。このように食料の多くを輸入に頼っている日本は、エネルギー消費によるCO_2排出削減の観点からも、さらに食品ロス対策に力を入れていくことが求められています。

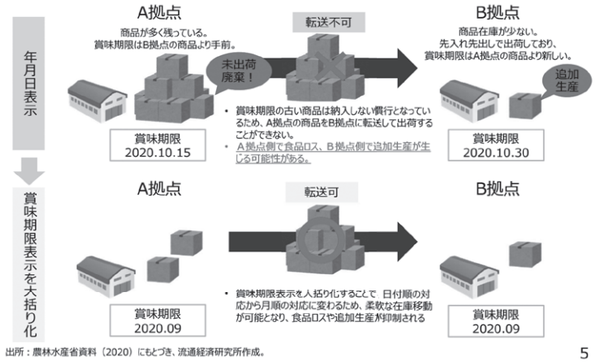
国内の食品ロス対策

では、どのような対策が進められているのでしょうか。日本には賞味期限に関する「３分の１ルール」という商習慣があります。これは製造日から賞味期限までをおよそ３等分し、最初の１/３を「納品期間」、次の１/３を「販売期間」、最後の１/３を「処分期間」として、例えば小売店への納品期間を１日でも過ぎるとメーカーへ返品となるなど、食品ロスの原因の１つとなっています。

例）賞味期限３ヶ月の食品

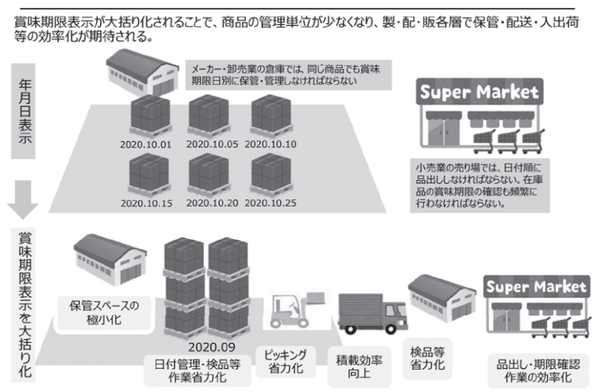
製造メーカー	⇨	小売店	⇨	返品／廃棄
１ヶ月以内に卸す		１ヶ月以内に販売		賞味期限１ヶ月残で処分

農林水産省は、このようなの商習慣を見直すべく10月30日を「全国一斉商慣習見直しの日」とし、令和３年度も「小売業者への納品期限の緩和」と「賞味期限表示の大括り化」など商慣習の見直しに取り組む食品事業者を募集し、応募した142事業者を公表しています（同日時点での数値）。



出所：農林水産省資料（2020）にもとづき、流通経済研究所作成。

5



和歌山での取組

一般財団法人和歌山環境保全公社が展開する「食品ロス」対策について紹介します。2020年にエコグッズ普及事業で作成した食品ロス対策用マグネットシートの配布を皮切りに、2021年度からは、食品ロス対策事業として「和歌山食と暮らしプロジェクト」がスタートしました。この取組は、食と暮らしに関する実践者モニターを募って、食品ロスの削減に取り組むことで生活スタイルがどんなふうに変わったかレポートしてもらうものです。また、参加者の座談会を開催し、アイデアや工夫、共通の課題について話し合うなどを行っています。今後は「残りがちな食材を使ったレシピ」の公開や、食品ロスに関する意識調査、各種コンテストの企画などを予定しています。

和歌山食と暮らし座談会の様子

食と暮らしプロジェクト座談会で出た意見（抜粋）

- 食材の可食部を意識するようになり、食材を余すことなく使い切るようになった。
- 買い物する時や、調理時に食品ロスを減らす工夫するようになった。
- 賞味期限を見えるように置いたり、大きく見えやすいように書いておく。
- カット野菜、カットきのこなどを利用し、食べ切れるだけの食材を購入するようになった。
- コンポストを利用しはじめて、廃棄がゼロになった

「和歌山食と暮らしプロジェクト」の様子は、今後の号でも紹介していきます。

キーワードは「消費選択」と「生活の工夫」

2030年度までに、温室効果ガス46%削減を達成するため、政府の地球温暖化対策計画の原案において、家庭部門からのCO_2排出を2013年度比66%削減するという目標が掲げられています。今、私たち一人ひとりに求められているのは「買い物での賢い選択」と「生活の工夫」です。家庭で直接消費されるエネルギー削減の工夫だけでなく、食に関する取組もどんどん注目されています。ぜひ、あなたが実践している取組を教えてください。

令和３年度わかやまこどもエコチャレンジ活動レポートの展示

◇わかやまこどもエコチャレンジとは

「わかやまこどもエコチャレンジ」は、環境学習の一環として、県内の小学４・５・６年生が、夏休み中に家族と一緒にエコ活動（節水・節電・ごみの削減）にチャレンジし、その活動をレポートにまとめる取組で、平成27年度から実施しています。県では、活動レポートを公共施設やイベントで展示したり、HPで公開し、広く一般に周知・啓発しています。

◇子供たちのアイデアが詰まった活動レポート2,253点を展示しました！

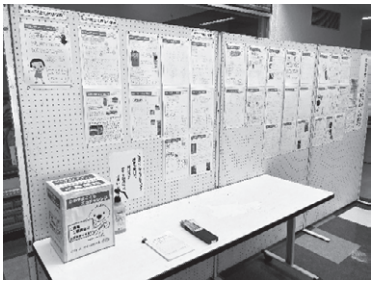
今年度は、3,622名の児童から活動レポートの提出があり、そのうち、2,253点の作品を県内11か所の施設に展示しました。

クラス全体で合計19,218ℓも節水した活動や、海洋プラスチックごみ問題の解決のため、ビーチクリーンに参加した活動、不要になった太陽光パネルを再利用し、非常用電源システムを作った活動など、子供たちの豊かな発想を活かした取組が多く見られました。また、エコチャレンジに取り組んだ児童から、「これからもエコ活動を続け、年下の人や大人にもつなげていきたい。」、「毎日、一人一人がエコ活動を続けることで地球温暖化を防止したい。」など、力強い感想も記載されていました。

活動レポートは、「県HP」や「おもしろ環境まつりHP」に掲載しておりますので、是非ご覧ください。

◆県HP：https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/032000/d00208837.html
◆おもしろ環境まつりオンラインHP：https://omokan.net/booth/3007
こちらのQRコードからご覧いただけます→

◇令和３年度　展示風景


印南町公民館

岩出市立岩出図書館

海南nobinos

◇意見箱より

「皆さん、普段から色々なエコ活動に力を入れているみたいですね。この様に、未来のために現在ある資源を有効に使ってください。」(50代)、「私も高校でSDGsを学んだり、研究活動を通して環境について考える機会が多くあるので、小学生が頑張っているのが、すごく微笑ましく感じるとともに、身の引き締まる思いです。子供の活動が大人を動かすことはよくあることです。私もその一員となれるように、このような活動機会に参加する大切さを感じました。」(10代)、「私達大人も日常生活から意識を持って取組むべき問題と思います。小学生の貴男・貴女が取組んでいるのが判りました。大人たちも負けない様に頑張って地球温暖化防止に協力します。」(60代)、「取組んだことで、日頃声をかけるだけでは直らなかった“電気の消し忘れ”などが減りました。今もシールを貼り続けています。」(40代)

推進員さん ひょっこり 訪問記 37

日高町　**嶋田奈津子** さん

推進員17期生の嶋田さんは、田辺市龍神村生まれ。１歳年上のお兄さん、２歳年下の妹さんの３人兄弟。子供のころは自然の木や葉を使って秘密基地を作ったり、山の中を散策したりしながら自ら遊びを見つける毎日を過ごしました。

都会への強い憧れやキャリアウーマンの道を歩みたいという思いから、奈良県の短期大学に入学し、卒業後は大阪の飲食店で働きはじめました。そんな折、ふるさとに戻る転機が訪れました。自ら作曲＆演奏活動を行っている嶋田さんは、大好きな音楽イベントで、自然を大切にしたスローライフを送っているアーティスト達と出会い、その影響を受けるようになりました。そして、その生き方を実現できる場所が、生まれ故郷の和歌山県であることに気づき、現在は、夫と３人のお子さんと日高町で暮らしています。

嶋田さんは、子育てを通じて、食や暮らし、そして地球のこれからについて、さらに意識するようになりました。そんな中、知り合いの推進員の勧めもあり、地球温暖化防止活動推進員養成講座に参加。それまで心に秘めていた想いを実現できる可能性を感じ、推進員として活動をスタートしました。養成講座で体験したSDGsカードゲームは、地域の繋がりや地域の対話づくりに力を発揮する取組であると確信し、ゲームの公認ファシリテーターの資格を取得。現在、子育てまっしぐらの中で、近隣の海岸で家族が気軽に集える「ビーチクリーン・ピクニック」を毎月行っています。そして、生き方を共感し合える農家やフードショップの仲間とともに、2020年12月からオーガニック・マルシェを定期的に開催しています。

将来は「ビーチクリーン活動の必要がなくなる豊かな世界を目指したい。そのためには関心のある人を増やして、それぞれが主体的に動けるよう、気づきや繋がりのある取組を進めていきます」と目を輝かせて話してくれました。

なるほど ザ・ワード

STOP温暖化・焦点の言葉 38

＊地球温暖化をめぐる報道などで、いま焦点となっている言葉を簡単に解説します

「グリーントランスフォーメーション（GX）」

最近「グリーントランスフォーメーション（GX）」という（またもや）横文字を見かけるようになりました。GXとは、脱炭素のためにグリーンエネルギーに転換することで、産業構造や社会経済を変革し、成長につなげるという意味の言葉です。

経済産業省は、2020年に経済と環境の好循環につなげる産業政策「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略」を策定しました。戦略では、脱炭素化することで産業としての成長が期待でき、温室効果ガス排出削減の観点からも取組が不可欠な重要分野14がリストアップされました。間接関連まで含めると、ほぼすべての業種が取り上げられた格好となりました。つまり、皆さんに関係する会社が脱炭素化の対象から外れることはなく、中小企業であっても例外ではないということです。

「脱炭素と言われても、資金がなければ何もできない」との声が聞こえてきそうですが、経済産業省は、世界中から日本に3,000兆円を超える環境関連の投資を呼び込み、成長と雇用を生み出すと目論みます。各企業さんは、自力で投資しなくても外から投資を呼び込むことで成長の波に乗れるというわけです。ただ、個別の企業が投資を集めることは容易なことではありません。今後は、関連分野や業界、地域内で協力するなどし、大きなまとまりとして投資を呼び込む方法が効果的だとみられます。その際、自治体や地方金融の振る舞いは投資を呼び込む際の生命線になります。世の中では、脱炭素の「企業仕分け」がすでに始まっています。以前のISOの時みたいな半ば強制的で強引な「企業仕分け」の辛い思いはもう懲り懲り。美味しい話を持ちかける（悪徳？）コンサルにも注意が必要。脱炭素では先手を打った側がチャンスを独占でき、後発までは分け前が残らない。行政や地方金融が二の足を踏んでいたり、各企業が独立独歩に固執しすぎたりして行動が遅れると、皆さんの会社はもちろん、いや和歌山の産業そのものが風をつかみそこね、脱炭素社会で孤立してしまうかも知れません。

脱炭素は企業経営を危うくする負担だと受けとめる人は多いですが、今では投資を呼び込み、企業を成長させる儲け話となってきました。例えば、化学関連企業が製造原料を和歌山の森林に求めたらどんなに高い評価を受けることでしょう？　観光業が徹底的に再エネ化させたら和歌山のイメージ「自然と文化」を分かりやすく演出できます。一方では、例えば森林や有機農業など吸収事業に参入して投資を集めることだってできます。世界的に超大手の某IT企業は、吸収事業として森林に投資する作戦を自社計画として発表しています。和歌山は森林が豊富で、農業も盛んです。吸収事業の展開が和歌山の脱炭素経済を活性化させる可能性は高いです。こういうことが、投資を呼び込むヒントになるのです。脱炭素の時代、前向きに先手打って取り組むことが、勝ち残って成長する唯一の方法かも知れません。どうせやるなら、楽しくわくわく進めたいもの。後ろ向きの発想はNGです。

なお、HPには、春号に掲載予定の「中小型モジュール原子炉（SMR）」についての解説を先行的に掲載しましたので、そちらも併せて御覧ください。

イベント情報

県内のクリーン活動がどんどん広がっています！

うみわかまもるプロジェクト
公式サイト　https://umiwaka.net/

和歌山生まれの10歳のアオウミガメうみわかまもるくんと一緒にビーチクリーンや調査活動を展開中！
各地の活動レポートもあります

うみわかまもる で 検索

主催：一般財団法人和歌山環境保全公社

わかやまクリーンプロジェクト
（LINE公式アカウント）

私達の地域でいつ行われているのか、和歌山県内のクリーン活動の開催情報が配信されます

ただいまメンバー募集中
下の２次元コードから登録

主催：NPO法人わかやま環境ネットワーク

YouTube情報番組 公開中！「和くらす～持続可能な暮らしのヒント～」

◆和歌山県内を中心に地域の
「持続可能な暮らし」
のヒントを動画で紹介

チャンネル和くらすへの
アクセスはこちら

「持ち帰り包装に気を配っているイチオシのお店を紹介したい」
「地元のお祭に参加します・子供向けのイベント開催します」
「気の合う仲間と一緒に海辺でビーチクリーンしています」
「火を使わずに美味しく食べられるお気に入りの時短レシピ教えます」
「自宅でエネルギーをまかなえる装置を開発している人を知っています」
などなど、和歌山の良いところを全国に向けて発信していくチャンネルです

あなたの活動をサポート わかやま推進員サイト わかやま 推進員 検索 イベント情報も随時更新

県センター通信

2022という新しい年を迎えました。前号「なるほどザ・ワード」で紹介した「家庭部門66%削減」という目標に向け具体的な取組が求められます。ひとつのアイデアとして「電力会社を選んでみる」という方法が挙げられます。2016年４月から電力小売業への参入が全面自由化され、家庭でも多くの小売電気事業者から選択することができます。先日、当団体が開催した気候変動セミナーでは「小売電力事業者がそれぞれ特徴を持って販売を行っていて、どのような種類の電力を調達しているかに注目することが大切である」と講師から紹介されました。具体的には比較サイトの利用です。「未来をつくる“でんき”の選び方（パワーシフト）https://power-shift.org/」では、全国各地の電力会社一覧があり、登録事業者ごとに自然エネルギー由来の調達割合が示されています。もし自宅に自然エネルギーの設備がなくても「選択」することで温室効果ガス削減に向けた取組につながります。ぜひ１度アクセスしてみてください。

2021 冬号 vol.43

わおん通信

発行／和歌山県環境生活総務課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL：073-441-2674　FAX：073-433-3590
mail：e0317001@pref.wakayama.lg.jp

編集・お問い合わせ／和歌山県地球温暖化防止活動推進センター
〒641-0014 和歌山市毛見996-2
TEL：073-499-4734　FAX：073-499-4735
mail：wenet@vaw.ne.jp

PRINTED WITH SOY INK